

1492年のユダヤ人追放令により、改宗を拒んだ7～10万のスペイン系ユダヤ人(セファルディーム)が居住地を追われ、多くはポルトガル諸都市やオスマン帝国の首都イスタンブールをはじめとするイスラム諸都市に定住した。「第二のディアスポラ」ともいうべきユダヤ人追放は、中世末期から近世のユダヤ人に大きな精神的衝撃を与え、宗教改革やオスマン帝国によるイスタンブール攻略、パレスティナ支配と共に、ユダヤ人の終末論やメシア思想をいっそう刺激した。ユダヤ人追放という精神的トラウマを引きずった16世紀のユダヤ人にとって、終末論とメシア思想はユダヤ人共同体の再生に不可欠であった。メシア到来は終末とユダヤ人救済の前提であり、メシアが到来するとすれば、それは「約束の地」パレスティナ以外ではありえなかった。15～16世紀において終末論とメシア思想は、ユダヤ神秘主義とも連動したのである。

中世中期までのユダヤ神秘主義は、シンボルやメタファーを介し神と天地創造の秘密を解き明かそうとする知識人の閉鎖的運動にすぎなかったが、中世末期の反ユダヤ運動の激化を背景に、ユダヤ神秘主義は民衆信仰を重視し、ユダヤ人民衆の強い支持を受けた。こうしたなかで神秘主義者を含む多数のユダヤ人が、メシア到来を期待して聖地巡礼を行い、パレスティナに定住した。この時期にパレスティナ巡礼を実践し巡礼記を書き残したユダヤ人としては、北イタリアのアシュケナジーム系ラビで神秘主義者のオバディヤー・ダ・ベルティノーロと、北イタリアのセファルディーム系ラビで神秘主義者のモーセス・バゾーラがよく知られている。本報告ではこの二つの巡礼記を手がかりに、追放期ユダヤ人の聖地巡礼を考察した。

アリヤーと呼称されたユダヤ人の聖地巡礼——アリヤーは聖地巡礼と同時に聖地移住も意味した——の目的は、終末とメシアへの期待、霊的救済と現世利益、「約束の地」での迫害からの癒しなどであった。霊的救済や現世利益と共に、追放期にとりわけ重視されたのは終末論とメシア思想であり、モーセス・バゾーラは「1524年に神は我々ユダヤ人を救済されたもう。それは火星と木星、土星が同一の軌道に入り、日食と月食が生じ、大きな戦争が勃発する時期である」とし、終末とメシア到来を1524年と断言している。ユダヤ人巡礼者の四大聖地とされたのは、「嘆きの壁（西壁）」やオリーブ山の位置するイェルサレム、メシア到来の地と目されたサフェド、マクペラの洞窟のあるヘブロン、マイモニデスの墓廟を擁するティベリアスであった。当時、最も崇敬を集めたのは、メシア到来の地にして預言者の様々な奇跡譚で知られたサフェドである。

手工業者を中心に少数の有力商人、知識人を加えたユダヤ人巡礼者は、講仲間や家族を伴って、聖地巡礼ないし聖地移住を実践した。出立にあたりシナゴグで祝福を受けた巡礼者は、靴、衣服、帽子、薬、現金、為替手形などを整え、相互扶助と自衛のための巡礼講を組織して、多くは夏場にベネツィアからガレー船で出発した。パレスティナの海港都

市に上陸した巡礼者は、ムスリムのキャラバンと契約し、ラバやラクダで聖地を目指した。各地のユダヤ人共同体が提供する慈善施設を利用したにしても、旅費は決して安くはなく、講仲間のトラブルも発生した。

15～16世紀のユダヤ人はユダヤ人追放という特殊な状況下に聖地巡礼を実践したとはいえ、巡礼行の具体的相貌は中世のサンティアゴ巡礼と大きく変わるものではない。